

(続紙 1)

京都大学	博士（経済学）	氏名	倪 卉
論文題目	現代中国蚕糸業の展開		
(論文内容の要旨)			
本論文の主題は、著者によれば、現代中国、とりわけ1980年代に実施された農業生産責任制以後の中国の蚕糸業、なかでも養蚕業と製糸業の展開過程およびそのメカニズムを分析することにある。 序章では、具体的に、以下の二点を課題として設定している。第一に、1980年代以降の蚕糸業の生産構造の変化を明らかにすること、第二に、経済環境が変化するなかで養蚕農民がどのように対応したかを検討することである。 この課題に迫るために、著者は、中国蚕糸業に関わる研究を、①山田盛太郎、山田勝次郎らによる経済史研究、②堀江英一らによる現地調査研究、③中・日研究者グループによる現代中国における蚕糸業研究に分けてサーベイを行う。これを踏まえて、先行研究では、蚕糸業に特有な生産連関及び地域性に規定された産業構造の変化が、十分に明らかにされていないと指摘している。そのうえで、著者は、一方で養蚕業から製糸業、絹織物業といった生産過程と流通過程の生産連関・価値連鎖論を含み込み、他方で現代中国蚕糸業を牽引する龍頭企業と養蚕農民との関係を契約農業論の視点から分析することができるアグリビジネス研究の方法を、中国蚕糸業の分析に適用することの重要性を指摘する。 以上のような課題と分析枠組みの下で、本論部分は5つの章から構成されている。 まず第一章「中国における養蚕業および製糸業の発展」では、養蚕業生産過程の構造と機能を説明し、主に政府統計と二次資料を用いながら、中国養蚕業及び製糸業の生産状況、シルク製品の国内取引及び国際貿易の現状、中国蚕糸業をめぐる制度・政策の流れを概説している。 これを踏まえ、第二章「養蚕業および製糸業の産地分布と産地移動」では、中国における蚕糸業の生産構造の変化を空間的視角から分析している。この章では、省あるいは区単位の地域区分に基づいて、蚕糸業の生産連関を構成する養蚕業、製糸業、絹織業及び貿易の順に主として統計データによる分析を行い、その結果、「伝統産地」から「新興産地」へと産地移動がなされてきたと主張する。併せて、蚕糸業の産地移動を分析するためには、①地理的及び経済的なマクロ環境、②政策及び政策環境の変化、③龍頭企業の役割、④養蚕農民の対応、という4つの視点が重要であるとする。 第三章「伝統産地—江蘇省と浙江省の事例」では、上述の視点から「伝統産地」の典型例として浙江省と江蘇省の蚕糸業の発展プロセスを、両省で実施した現地調査に基づいて詳しく分析している。「伝統産地」では、養蚕を営む農村の変容が養蚕地域における工業化・都市化の進行などによって生じていた。加えて「伝統産地」での養蚕業の衰退要因として、気候と養蚕技術、「東桑西移」政策の影響及び蚕糸業の構造変化による影響などがあったとする。 第四章「新興産地—広西壮族自治区の事例」では、「新興産地」の典型例と			

して広西区を取り上げ、2000年以降、同区において養蚕業が急速に発展してきた過程を現地調査に基づいて詳しく考察している。広西区の実態分析を通して、「新興産地」の発展要因として、「伝統産地」と異なり、生産構造面では養蚕農民が中心となって稚蚕共同飼育室などによる多様な農民組織が展開していることや、流通構造面において多様な繭の流通チャネルが形成されていること等が析出されている。

第五章「伝統産地と新興産地の産地間関係と中国蚕糸業の生産構造の再編」では、現代中国蚕糸業の全体像を、第三章と第四章で検討した「伝統産地」と「新興産地」との「併存」構造として捉え、それらを担う経済主体に着目して、中国蚕糸業の地域的・空間的發展メカニズムを展望している。その結果、「新興産地」の発展によって、両産地間及び各産地内の関係が変化し、生産地域の立地地図も担い手も大きく塗り替えられ、これによって新たな生産構造が形成されてきたとする。

最後の終章では、本論文で明らかとなった点を総括し、今後の研究上の課題を提示している。

(論文審査の結果の要旨)

中国の生糸生産額は、現在、全世界の4分の3を占めているといわれ、世界最大の生糸輸出国でもある。一方、製糸業は、かつては産業資本主義の発展過程において極めて重要な位置を占め、産業分析の枢軸におかれてきた。しかし、現代中国の蚕糸業については、その産地構造や経済的主体にまで踏み込んだ本格的な研究は、これまで存在しなかった。

本論文は、この現代中国における蚕糸業の実態把握に、数次にわたる現地調査を踏まえて、果敢に取り組んだ労作である。

具体的には、以下の点で評価される。

第1に、山田盛太郎、山田勝次郎、堀江英一ら日本人による日本及び中国の蚕糸業分析の方法から学び、養蚕から製糸業、絹織物業に至る生産連鎖に沿って、産地の生産構造を分析するだけにとどまらず、これらの産地構造分析と近年のアグリビジネス研究におけるフードチェーン論や商品連鎖論、契約農業論の接合を試みていることである。これは、中国蚕糸業の分析枠組みとしだけではなく、農業経済学分野における産地構造分析の方法として大いに注目される。

第2に、本論文により、中国蚕糸業が「伝統産地」と「新興産地」に大きく二つに区分され、前者から後者に産地が移動していることが明確となった。著者は、現地調査や専門業界紙・誌による丹念な情報収集を踏まえ、その要因として、「伝統産地」における都市化の進行にともなう環境汚染、換金作物の多様化、労働力不足、政府による「東桑西移」政策に加え、後述する龍頭企業の影響を明らかにするなど、興味深いファクトファインディングを行っている点も評価される。また、「新興産地」では桑園や養蚕業の拡大はあるものの、製糸業と絹織物業の未発達による生産ギャップが存在し、そのことが「新興産地」から「伝統産地」への桑の移出構造や、多様な流通チャンネルを生み出している事実を指摘している点も興味深い。

第3に、上述の産地移動や産地の産業構造の変容を牽引する主体として、製糸業におけるリーディング・カンパニーである「龍頭企業」が重要な役割を果たしていることを明らかにした点である。とりわけ1980年以降、上述のような産地移動にともなって、もともと国有企業だった農産加工企業が、養蚕農家との契約生産からはじまり貿易業務までを一貫して経営する「龍頭企業」となったことで、桑園の団地化や共同飼育、生産設備の近代化等を通じて養蚕農民に大きな影響（指揮権）を及ぼす存在となっている。その具体的な態様が、「伝統産地」と「新興産地」との相違を含め、具体的に明らかにされている点も重要である。

だが、本論文には、いくつかの課題も残されている。第1に、理論的な問題として、資本主義農業の分析ツールとしてのアグリビジネス研究の方法を、中国の蚕糸業分野における「龍頭企業」分析に適用する場合、その特殊性を考慮したより緻密な媒介環が必要であろう。それとの関係で、土地所有・使用权制度が、「龍頭企業」と「農民」との関係性をどの程度規定しているかも明らかにすべき課題であろう。第2に、著者が課題のひとつに設定した養蚕農民の経済環境への対応については、より説得的なデータで実証する必要がある。また、強まる「龍頭企業」の影響下にある養蚕農民の能動的対応や組織化の動きを概念的に捉える上で有効とされるアクターネットワーク論についても、著者は「適用可能性」を指摘するにとどまり、その具体的

適用は今後に積み残された課題となっている。第3に、蚕糸業に関する政府統計の制約があるとはいえ、経年変化を論証する際には使用年次の扱いに慎重さが必要であろう。入手可能な最新のデータで補足すべき箇所も散見された。第4に、現代中国蚕糸業の産地構造とその動態的変化の全体像を、生産連鎖と産地移動に着目しながら明らかにした点に本論文の貢献があるとはいえ、各章の論述過程で、個別論点をめぐる既存研究との接合が十分に明示されておらず、そのため本論文によって得られた新たな知見や学術的貢献がやや不鮮明になっていることである。また、全体として、文章が冗長であり、必ずしも論旨が明快ではないところが見られた。より論理的な記述と展開が求められる。

とはいえ、以上に挙げた諸課題は、将来に向けた研究の発展方向を示唆したものであって、本論文が現時点において達成した学術的価値をいささかも損なうものではない。よって、本論文は、博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、平成24年2月24日、論文内容とそれに関連した諮問を行った結果、合格と認めた。